

# SIAFラボ通信 第2号

サイアフ

SIAFとは、2017年に2回目が開催される、Sapporo International Art Festival（札幌国際芸術祭）の略称です。

SIAFラボは、札幌市資料館内にある札幌国際芸術祭の活動拠点です。



SIAF ラボ通信は、札幌国際芸術祭の拠点である SIAF ラボから不定期に発信する「かわら版」です。

この場所で起きる出来事はもちろん、札幌の街や、時には全国へ飛び出して、さまざまな人の言葉を集め、紹介します。

いろんなジャンル、たくさんの人の繋がりを、生み出していく。その繋がりから、またまた偶然生まれるコンテンツ。

そんな「かわら版」を目指しています。

## INDEX

ラボの活動、Bent Icicle Project「冬のおもいで〜ツララと過ごした日々のこと」(p.1-2)

行ってみた、行ってみたい! 全国の芸術祭「芸術祭あちらこちら」(p.3)

みんなで参加!「アートカフェ in 資料館 vol.17 レポート」(p.4)

アーティスト・インタビュー「三田村光土里さんの Art & Breakfast」(p.5-6)

札幌、北海道のこと。ミニコラム「なしてか読まざる」(裏表紙)

# 冬の おもいで

## ツララボと過ごした 日々のこと

プロジェクトの発案者であり  
プロジェクトリーダーの一人でもある  
アーティストの小町谷圭さん  
お話を伺いました。

2015年10月17日のプロジェクト説明会を皮切りに、  
誰でも参加自由な部活動のような形で  
「Berticle Project-Tulala」（愛称：ツララボ）が始動。

ツラ  
ラボ

2016年2月2日〜14日には、活動の成果発表の場として  
札幌市資料館で「さっぽろ垂氷まつり」を開催した。  
人工つららの制作や、雪の研究者として知られる  
中谷宇吉郎についてのトークイベント、「つらら新聞」の発行、  
本物のつららを3Dスキャンするワークショップ、3Dプリンタで  
出力したつららのパーツを使ったアクセサリー作り、つらら型の  
チョコレートづくりなど、盛りだくさんの内容となった。

“の照らし方のアイデアが生まれてきたところが、今回のプロ  
ジェクトの面白かった点ではないかと思っています。”

チャレンジすること、クオリティを保つこと

透明な「つらら」を3Dスキャンする、冷凍庫の中で人工的に  
「つらら」をねじ曲げるといった取り組みは、研究者ですら誰も  
やったことのないチャレンジングなことです。専門ではない人た  
ちが興味本位で集まり、試行錯誤していくその過程を見せること  
は、プロジェクトとして重要だと考えていました。老いも若きも  
関係なく、みんな初心者としてはじめられるのが面白いところで  
もありました。

一方で「さっぽろ垂氷まつり」は、これまでの成果を発表する  
以上、表現としての強度はなるべく落としたいという点での  
苦勞がありました。“祭”として外部へ公開するための配慮との  
間で、企画の量とマンパワーの配分をもう少しうまく出来たので  
はないかという反省はあります。「参加者と一緒にプロジェクト  
をつくること」と、「クオリティの高さ」のバランスを保つこ  
とは、難しさを持っていると思います。

大切にしているのは

「プロジェクト」とは、鑑賞者が作者の考えを追体験するといっ  
た「作者」と「鑑賞者」という枠組みを超えたところで機能する  
のではないかと考えています。また、技術によって分けられてき  
た、「作り手」と「使い手」の関係を変えていく方法としてても有  
用な手段だと思います。プロジェクトを行う際は、既にある課題  
ではなく、新しい問いをたてられるのか、ということを意識して  
関わりたいと感じています。



『回転式巨大つらら造形マン』によってつくられた人工つらら  
(札幌市資料館前庭、2016年2月8日)



SIAFラウンジにて、つららアクセサリーを制作している様子

なぜ「つらら」なのか

個人的な話ですが、札幌への赴任が決まった時に北海道を知ろ  
うと思い、読んだ本が中谷宇吉郎著の『雪』でした。物理学者  
であった中谷は、SIAF2014のアーティストとしても紹  
介されています。北海道の近代の暮らしや文化に深く関わった  
中谷の仕事が、芸術の文脈から再評価されているということも、  
SIAFラボでも取り上げたいと思いました。そこで出て来たのが  
「つらら」です。中谷は雪の研究のみならず、アイスコアや氷  
の弾性についても研究をしていましたし、遠からず共通した視点を  
共有しながらプロジェクトを遂行できるのではないかと、また  
「つらら」をとりまく文化的な背景をリサーチすることが面白そ  
うだなと思いました。

「参加者と一緒にプロジェクトをつくる」をテーマに

プロジェクトを行う上では、ある程度のテーマや計画も必要で  
すが、予定調和になってしまうことほど面白くないことはあり  
ません。どうやってたら出来るのかわからないという地点から、い  
るような視点で考えていきたいと思っていました。暗がりになん  
な。懐中電灯“で明かりを照らすことができるのか、という作業  
を皆で始めることが重要だと考えていました。メンバーはかなり  
バラエティ豊かで、おのおの専門の交差で、新しい”懐中電灯



とちらい  
栃内くん

小学6年生。SIAFラボとは、2014年の  
札幌国際芸術祭からのお付合い。

ー(笑) そうなんだ! 今の方が、知っている人が沢山いて、自  
分が居て緊張しない場所だったりするのかな。ツララボで  
結構知っている人が増えましたもんね。

はい。最初ここに入った時(2014年)は…(緊張で) カタ  
カタでした。

ー学校では、SIAFラウンジの話とかするのですか?

いやー、(もし話を) したら馬鹿にされますね。なんか「お  
前なんだよ、変だよ」みたいな(笑)。

ー「変なところ行ってんだろ」みたいな? (笑) じゃあ、SIAF  
ラウンジは学校とは違う世界というか…(学校とは) 全然違  
う人がいて、違うことをするような場所という感じでしょ  
うか?

そうですね。

ー私たちも栃内くんが居てくれてすごく面白いんですよ。な  
ので今後も、よろしくお願いします。

はい、よろしくお願いします。

ー今回ツララボに参加したことで、何か変化や発見はありま  
したか?

とても勉強になりました。私がこういったワークショップ  
に参加するのは、2つ理由があります。ひとつはものを作る  
のが好きだからなんです、もうひとつは、自分の考え方が  
間違っていないかなと確認する、という事。例えば、特殊な  
狭い業界の世界でずっと仕事をしていて、当たり前になってく  
る事がたくさんあります。でもそれは一般的には当たり前じゃ  
なかったりする。

人に対しての考え方や言葉とか、いろんな人が集まる所に行くと、  
そういった事を再確認できる。いろんな人のやり方を見て、やりとりして、自分を矯正するというか。いつもい  
つも発見です。こういったワークショップに参加すると、コ  
コロもカラダもちゃんと満たせる。ものづくりも満足するし、  
自分の気持ちもちゃんと照らし合わせられる。私にとっては、  
とても大事なことです。

ー最後に、ツララボに参加した率直な感想があれば。

ホントに楽しかったです!! とても。

ーワイワイしてましたよね! 「これやってみたい!」 と思った  
ことを皆で考えよう、という活動でした。

すごく自由で、いい意味でコリイからいいんだと思います!  
きっと(笑)。

ーツララボには途中からの参加でしたね。

最初は他のことをしに来てたんですよ。で、その時に「ツ  
ララボ」っていう催しがやってるよーって(聞いて)。つらら  
のことだったら、面白いの(出来事) を知ってるから。つら  
らで遊ぶことが多かったですから。

ー今回、普段あまり話さないような年齢の違う人(大人) が  
多かったと思いますが、学校の友達とは違う存在ですか?

学校の「友達」とは…違いますね。学校の「友達」と「先  
生」だったら「先生」に近い感じ。「友達」なんて失礼です。

ー色々知らないことを教えてくれる人という感じ?

はい。

ー栃内くんはツララボの活動が始まる前から、SIAFラボの  
活動拠点である SIAFラウンジに来てくれていましたが、ラ  
ウンジはどんな場所ですか?

面白いことができる、休憩所とかカフェとか? そんな感じ  
です。

ー来やすい場所ですか?

最初は来づかったんですけどね(笑)。



岩下さん

普段は移動体の会社に勤務し、設計を担当。  
札幌オオドリ大学雪ドリ部にも参加。

ー今回、積極的に参加してくれている印象がありました。

「ビジネスじゃないし、適当でいいや」じゃなくて、やるか  
らにはちゃんとしたものを作ってたし、参加した人には  
作る過程や面白味を味わって欲しかったので、できる限りは  
参加して準備しようと思いました。

ーツララボの活動は、参加者自身がつくったり考えたりする  
立場に立つ、という点が特徴的だったと思いますが、どんな  
感想ですか?

逆に言うとは私は「これでやってね」っていう、既に用意出  
来ているモノでは物足りないというか、「こういう方向性で  
やって、あとはみんなで好きなアイデア出しながら形にして  
いこう」という方が好きですね。その方が、みんなでつくっ  
ている感じがして面白いと思います。

ーやっている“過程”を楽しめる人にとっては、今回のよう  
な活動は良かったかもしれません。

面白いです! 結果じゃなくて、その過程も大事だと思  
っているの…その間で、例えば失敗したとしてもいいん  
ですよ。最初に思っていたものと違うものが出来ても、それ  
はそれでいいんじゃないかと。みんな楽しみ方はそれぞれだ  
から。その方がいいんじゃないかな。

ツララボに参加してくれたメンバーに  
突撃インタビュー!

★つららを見つければスマイルで雪を振りまくる楽しい日々でした。インタビュー担当: SIAFラボスタッフ かなり



3Dスキャナによるスキャン実験を行っている様子

小町谷 圭 (こまちや けい / 写真 右から二人目)

東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻  
修士課程修了。絵画制作を経て電子メディアを使用した作品を発表。  
主な活動に、アナログ放送停波直後に各局の周波数に合わせ過去映  
像を流した電波ジャックインスタレーション「Endless Tv」など。現在、  
札幌大谷大学専任講師。

ツララボに関するお問い合わせ: tulala@siaf.jp twitter: @tulala\_siaf



# 芸術祭あいちトリエンナーレ

各地の芸術祭を紹介するこのコーナー。  
今回は、今夏開催される「あいちトリエンナーレ2016」のスタッフとして働くお二人にインタビューしました！



清澤 暁子（きよさわ さとこ／左）  
大阪府生まれ。あいちトリエンナーレ2013、札幌国際芸術祭2014などを経て、現職。  
丸田 鞠衣絵（まるた まりえ／右）  
札幌生まれ。舞踏カンパニー「山海塾」の制作、札幌国際芸術祭2014などを経て、現職。

世界が広がっていくようなイメージで捉えたいって。そうして中心が辺境かみたいな考え方を取っ払うということ。これと同時に、芸術祭として愛知県でやるっていう意識もすごくある。

例えば、ダンサーの山田うんさんに奥三河の花祭を取材してもらったり、著名なデザイナーで豊橋市拠点の味岡伸太郎さんは、地域の土を調査しながらいろんな作品を発表してきたアーティストでもある。あと県内の芸大出身で面白い作品をつくっている若手を起用したり。今回は前回に引き続き岡崎市と、さらに豊橋市も会場になって、地元の人あんなに知らないような愛知県の姿を芸術祭を通して見せていこうというのを強く感じる。それをローカルティに集約させるだけじゃなくて、地元の人外から来た人も、なんか愛知ってこんなに面白いんだとか、こんな文化があるんだという発見につながるんじゃないかと思っています。

ー期待する作家や作品は？

清澤 誰かなあ。結構ね、地味って言われたりもする（笑）、ラインナップは決めたけどかなり面白いよ。

丸田 選べないなあ（笑）。  
清澤 去年の秋に北海道にもリサーチにきていたアラスカ出身のニコラス・ガラニン。アメリカの先住民であるという彼自身の背景が強いというが、そのことから作品を作っている人なので、アメリカとのせめぎ合いだったり、人種差別だったり、そういう問題に直結する仕事をする。そのままアクティビズムにもつながるし、逆に、そうならざる

をえないのかなって。こういう感覚って日本人だとかなか持たづらいということが、彼みたいな人と話をしたり、その作品をみると気付かされる。  
丸田 全部見て欲しいけど、全体で言うと、やっぱり、あいちトリエンナーレは他の芸術祭と比べて、パフォーミングアーツの公演数も多いので、それも見所。その中でも、日本で招聘する団体はどうしても欧米、フランス、ドイツとかが多くなる中で、港さんの色が濃く出てるなって思っの、例えばブラジルやスペインなど多方面から集まってくるの、分野も、フラメンコ、能、オペラがあったりとか。

全部一個一個推したいところですが（笑）、その中でも山田うんさんが、愛知の奥三河地方に700年以上にわたって伝承されている花祭っていうお祭りをリサーチして、それをものに新作を創ろうとしていて。私自身は北海道で育っているの、お祭りの概念がそもそも違う。そういうお祭りがあつてということも、このトリエンナーレを通して知れたのが個人的にすごく面白いかな。花祭は夜を徹して踊る踊りなんですけど、私もリサーチで来たうんさんと一緒に体験しました。それがどう舞台になるのか、すごく楽しみです。うんさんがインタビューで、「花祭は神事なので、そのまま舞台にのせるのではなくて、トリエンナーレでそれを扱う今の自分の物語をそこに差し込むことで、また別の開き方をしてみたい」と話していて。創作活動としてすごく面白いなあと思って。うんさんはとにかく観てもらいたい。

清澤 VAはトルコ人のゼイネップ・オズ、ブラジルのダニエラ・カストロ、どちらも女性で若手のキュレーターが、日本でほとんど知られてない人たちを挙げてきているので、私はすごく楽しみです。ダニエラの選んだブラジルの作家は4人全員、既にリサーチにきたよ。すごい彼らは…いいの！（笑）びりびりしないっていうか、すくく仲がよくって、身体的にも近いっていうか、あつたかい人たちがあって思っ。ダニエラは、身体や感覚を重視している作家を選んで。そう、ラウラ・リマっていう作家が、この前帰ったところなんだけど。鳥たちのための展覧会っていうので、空間を作ったことがある人なのね。今回も豊橋のまちな

か会場で、展示室内で小鳥を放つプラン。だからこう、身体っていても、人間も動物も、なにもかも等価に扱おうとする。鳥がいて、人間はそこに入る逆に鳥に見られるみたいな、関係を攪拌するような作品になりそう。私はラウラの作品がどうなるか、すごく楽しみです。

丸田 PAでも、ブラジルの作家ダニ・リマは、日常に溢れてるものを舞台上に持ち込んで、それをダンサーたちが遊びながら展開していく作品を発表します。日常的なものを通して、別の世界を見る、みたいな。

ー来年は札幌国際芸術祭が開催されますが、今回の札幌に期待することは？

清澤 札幌は、すごくいい場所だからね…。  
ー遠い目ですね（笑）。

清澤 制作環境として素晴らしい土地なので、ぜひ次のSIAFでも作品を見せて終わりたいと思って、長いスパンで作家が滞在してできた作品を見たいなって思っ。

（2016年2月27日、名古屋市内の喫茶店「モーニング」を食へるお二人）

名古屋名物、小倉サンド



## あいちトリエンナーレ2016

虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅  
芸術監督：港千尋  
会期：2016年8月11日～10月23日  
会場：愛知芸術文化センター、  
名古屋美術館、まちなか会場  
（名古屋市、岡崎市、豊橋市）

インタビューに出てきたアーティストは、公式WEBでチェック！ ▶ <http://aichitriennale.jp>

# アートカフェ in 資料館 vol.17 レポート

2016年3月6日 札幌市資料館 2F 研修室



札幌市資料館の研修室を会場に、「アートカフェ in 資料館」の拡大版となるワークショップが開催されました。今回は、2017年に開催される札幌国際芸術祭のディレクターに就任した大友良英さんが発した「芸術祭ってなんだ？」をテーマに、参加者の36名がグループに分かれてディスカッションを行い、芸術祭について考え、意見交換をしました。その一部をご紹介します。みなさんも一緒に、芸術祭について考えてみませんか？

## トークテーマ1 芸術祭ってなんだ？

- ・関心を持たれない、スルーされるのが祭りとしては一番致命的。面白がってもらえれば良いが、ネガティブだろうが、アンチだろうがあれば祭りは盛り上がる。とにかく関心を持ってもらうことが大切。
- ・本州の祭りは競い合う要素が大事である（町内会毎の神輿のように）。他の芸術祭も良く見て、張り合うことも大事だと思う。
- ・場所。芸術祭は非日常のもの。そういった場所、アートやアーティストに出会う場所であるべきでは。
- ・祭りとは、ごった煮。前回は、高みにある高尚な芸術の展覧会だった。アーティストと鑑賞者が分かれている。（次回は）プロアマ関係なく、ワークショップのような形で作品を創り展示するという事も可能だろう。展覧会ではない祭り。
- ・普段からその地域でアートの活動している人たち、公募展、協会、個人でやっている人たち、あくまでもプロではない人たちを「土」としたら、芸術祭が「花」であろう。
- ・祭りは、地域の人たちが参加してみんなで作り上げてゆくもの。
- ・日本の祭りには縁日がつきもの。祭りを盛り上げる縁日のような場も必要。

## アートカフェとは？



アートの理解を深めるため、作品やひとつのテーマについてみんなで話し合う場をつくらう！という趣旨で、SIAF2014をきっかけに始まったイベントです。毎回トークテーマを提案した方が店長となり、持ち寄った軽食を楽しみながら交流できる場です。

## 店長さんたちの声

私が店長をやったことで、普段アートカフェにあまり興味を示さない大学の友達を誘って見たら来てくれたのが嬉しかった。学校では出逢えない、いろんな年齢の人と話ができ楽しい。  
vol.12 写真の魅力って？ 店長：寺岡さん

自分一人で考えていたことと参加者の知識の違いについて教えられることが多かった。そういう自分と違う経験や知識を持った人がいることを認識できたのが良かった。  
vol.14 学校の図画工作と美術、とアート 店長：高橋さん

SIAFでのつながりはなかったが、アートカフェが企画を公募していて、既に12回の歴史とネットワーク（つながり、広がり）の土台があることが魅力的だと感じた。  
vol.13 アート×ダイアログ×ゲーム 店長：安部さん

話してみたのは楽しかったが、そのあと繋がらない。意見を聞けたが、何かが変わるのか？何に繋がるのかわからない。何回かやっていくうちに何かが見えてくれば良いと思う。  
vol.11 境界線って？／vol.17 芸術祭ってなんだ？ 店長：成田さん





みたむら 三田村 光土里

美術家。愛知県生まれ。東京在住。「人が足を踏み入れられるドラマ」をテーマに写真や映像、音楽、言葉、日用品など、様々な素材を用いた空間作品を国内外で発表。

このシリーズでは、アーティストや作家など様々な人に自身が大切にしているものやこと、「〇〇」を中心に話を伺い、同時に「札幌」の印象やイメージなどをお聞きします。

今回は、美術家の三田村光土里さんに、ご自身のプロジェクト、アート&ブレイクファストについてのお話を中心にインタビューしました。アート&ブレイクファストとは、2006年から世界各地で継続して行われている滞在制作アートプロジェクトです。

美術家の三田村さんの考案で行われているアート&ブレイクファストですが、インターナショナルディとして2016年の2月21日にさっぽろ天神山アートスタジオにて開催されました（日本、イギリス、タイ、ドイツ、韓国にて同時開催）。なぜ朝食なのか、アートに携わるきっかけなど、インタビューさせていただきました。

ー三田村さんがアートに入っていくきっかけは何だったんですか？

美大に行きたいと思っていたんですが、迷った末に短大の人間関係科に進んで、その後にファッションの専門学校に行きました。その時に廃墟好きになってしまい、ドライブしながら廃墟を探しに行くんです。すると写真が撮りたくなり写真を始めました。就職とともに東京へ上京して、洋服のデザイナーとして15年ぐらい働いていました。仕事をしながら写真学校に通いました。就職して5年ぐらいたってから洋服の世界で知り合った友人が会社をやめて、六本木のアートギャラリーでバイトし始めたんです。遊びにこない？と誘われて、それから自分も入り浸るようになっていきました。集まってくる人々もめっちゃ色々な経歴の人々ばかりで、NYでジャンキーだったアーティストとか、絵を描いているサラリーマンアーティストもいて、美大に行ってもアーティストになれるんだと自分の中で気づいたんです。専門学校の時に先生が課題をみて「みどりちゃん、アーティストになりなよ」と言われたんですが、その時は無理だと思っていたので、アーティストが集まって、話して、その居心地の良さから、アートで見るだけではなく場所だということに気づいて、受け入れてくれる「場所」を見つけ

しかし、続けているうちに、2006年から始めたインスタレーションの形が、2011年ではほぼ完成形を迎えて、少しパターンが出てしまっていると思っています。今夏に参加する、あいちトリエンナーレでは、集大成を見せようと思います。また、同時期にドイツで四ヶ月間アート&ブレイクファストで滞在することが決まっているので、双方向でできる新しい形のアート&ブレイクファストができればいいなと考えています。いつもはいろんな国のトイソルジャーを材料として持ち歩き、またその土地のトイソルジャーを増やして行くことにしています。おもちゃなんだけれど、その土地柄がよくでているのです。中世の歴史が色濃いウィーンは弓矢とか、紛争の歴史が身近な北アイルランドはかなり作り込まれたトイソルジャーがあったりと、バラエティ豊かなですね。それらのトイソルジャーがメッセージを演じることで、インスタレーションができあがってきました。今回はそのトイソルジャーを全て愛知に送って、アート&ブレイクファストを制作する予定です。愛知はトイソルジャーが、ドイツは私自身が、滞在して制作するという形をとろうと思っています。朝食はドイツでも開催するけれども、2ヶ所に分かれて制作する環境を生かして実験的なことにチャレンジしたいと思っています。

私は30歳からアートを始めたので、普通より遅れた気持ちでした。長く制作を続けてきました。するとやはり、年齢が増えると共に、なかなか人から助言をもらえなくなってしまう。自分でチャレンジして自分を変えていくこと、ダメだったらダメだという判断をしていかなくてはいい。違うんじゃない？って人が言ってくれないから自分で判断しなくてはならないですね。やはり同じことをどんどん繰り返して自分の型ができる

たと思いました。朝食のイベントにも繋がるんですけど、私自身はもともとアートの外側にいたんです。アートを見に来る一般の人々と一緒に、好きでも入りにくかったのが、友だちがギャラリーに勤めだしたことで、入りやすくなるみたいな。なかなかそういう機会や場がないということから、場所としての機能がアートにはあるべきだと思いました。

ー三田村さんの作品のコンセプトに『人が足を踏み入れられるドラマ』とありますが、展示の「場」を作ること朝食の「場」を作ることの違いはありますか？

展示に関しては、より緊張感がある空間と言う意味の「場」だと思っています。足を踏み入れた人が日常とはちょっと違う表情を帯びた空間で、特別な気持ちになれるような場所をつくりたいと思っています。私は、普段写真や古道具など身近なものを使ってインスタレーション空間をつくっているのですが、今ここにいる空間と私の作品の何が違うの？と言われても大きな違いは無いんです。

しかし、作品がなにか違う表情を帯びることと日常生活とは違う空間になるはず。日常の物が並んでいるし溢れているからこそ、来た人はより、なにか違うドラマのなかに入ったような気分になれるんじゃないかと思っています。まったくかけ離れた物やイルミネーションやイリュージョンがあるのではなく、日常なのかな？非日常なのかな？どっちなのかな？と、鑑賞者が自身と違う空間を引き寄せてものを見れるかなと思っています。

朝食も同じで、いつでも誰でもしていることとんだけど、アートと共に知らない人やアーティストたちと朝食を食べることによって、と、失敗したくないから（それを）続けてしまう。”同じことばかりだね”と、正面からはみんな言ってくれないから、苦しくても毎回新しいことをしていきたいと思っています。

ー常に挑戦ですね。私もそうありたいと思います。今回、札幌に滞在して印象はどうですか？

人が全体的におおらかという印象です。北海道という、本州とはまたひとつ違う日本を実感しました。今は特に雪がある時期です。『雪国』で検索してみると、国土交通省から出ている情報で日本の国土の6割が雪国とのこと。北海道が日本の国土面積の2割なので、雪国の3分の1以上は北海道なんだけだね。東北や信州も含めつつ、雪国という場所に2千万人以上の人が住んでいて、日本の人口のほぼ5分の1を占めているということに驚きました。住んでいる人たちがその人数なので、出身の人を含めば雪国に生まれ育った人はもっといるということなんです。日本の中心と言えば東京や首都圏だと思っている人が多いでしょうけれど、日本の半分以上は雪国なんだということ、雪国出身の人がそんなにいるということに驚きがありました。スタンダードではないけれど、マイノリティではなく、より身近に感じました。

それと、この季節だからというのもあるかもしれないですが、お店を見ると洋服とかファッションは同じだけれど、靴が違った。上に着るものはあまり変わらないのに、靴だけは雪用に機能がしっかりしていていい。万全体勢だと思いました。フィンランドに住んだときもスノーブーツはいらなかったんですけど、雪の質が違いますよね。子どもから大人までアウトドアな感じがしました。



なにか少し特別な一日の始まりになればいいなということです。私の滞在制作のなかで朝食は、場所が許せばインスタレーションの隣で食べるようにしています。美術館の中では、同じようにアートが好きだけれど普段は会えないような人と一期一会でアートのことを話したり、やっぱり普通とは違うドラマチックな特別な時間を感じてくれればいい。特にアート&ブレイクファストのインスタレーションに関しては、公開制作の期間、ずっと滞在できるわけではないのですが、できるだけ私自身もその場にいるようにはしています。そうすると、やはり直接、感想が貰えるのです。海外だと特に、色々な話をしながら、そこから気づくこともあって作品が増えていく。人に来てもらえることで、見てもらえること、そして話すこと、反応してもらって作品になっていきます。一方的ではなく、インスタレーションを通して人と人がコミュニケーションしていくことができるということですね。

ー減ったり増えたり変化しますか？

変化することはもちろん、変えて行くことが多いかもしれないです。土地柄によって、町によって、歴史も違うし人も違う。経験が変化して作品が変化する。



## ！ Art & Breakfast Day ！

さっぽろ天神山アートスタジオでは、国内外問わず様々な場所から来る滞在者と、来館者とのコミュニケーションの場を提供します。

事前申込は不要です！

日時：毎月第3日曜日 10:00～12:00

参加料：無料（朝食1品持ち寄りをお願いします）

場所：さっぽろ天神山アートスタジオ1階  
札幌市豊平区平岸2条17丁目1番80号 天神山緑地内\*  
お問い合わせ：011-820-2140

\*公共交通機関をご利用ください。公園駐車場は冬期閉鎖しております。

# なしてか読まざる

札幌 北海道を再発見、再認識するコラム第一弾。  
今回は北海道弁をモチーフにした短編小説をご用意しました。

さて、いくつかの北海道弁が見つけれられるかな？

## 短篇「ばあちゃん」と美流渡<sup>みりや</sup> 羊ヶ丘寅作

北海道は岩見沢市栗沢町にある美流渡までは札幌からJRで数十分、そこからさらに一時間に一本の路線バスに揺られなければならない。東京の美術大学に通う崇史はこの夏休み、大がかりな作品制作のため、はるばるこの美流渡にある祖母の家を訪れていた。小学校までを過ごしたその畑の一角に、半月かけて収集した素材がうすたかく積まれている。

「たかす、たかす。」

そう呼ぶ声に顔を向けると、がに股の祖母が袋を下げ、右へ左へと振られながらこちらへやって来た。

「朝からずっと仕事して、あんたもたいたいさ。ほれ、ガラナとパンさ、どっかよかったですも食べて。」

「ああ、ありがと。これ、なにパン？」

「ちくわちくわ。あつこのまるよしさんで売ってたんだ。」

「マルヨシサン…。」

これはよもや現代に息吹くアニメズム（アイヌ文化にも見られる、万物に神が宿るとする信仰）だろうか？ そんなロマンに耽りながら、崇史は差し入れられたドリンクの濃厚な糖とカフェインが疲労を打ち消していくのを味わった。まさしく「ガラナ」の名に相応しい威力である。ヘルシー志向の崇史は思わず原材料名に目がいった。

## 対訳用ミニ事典

ガラナ…カツゲン、ナポリンに並ぶ、三大道民飲料のひとつ。

たいぎ…大変だ。

よっかか…寄りかかって。

ちくわパン…北海道特有の調理パン。

～さん…店名にさんをつける習慣。

がつぱり…いっぱい、たくさん。

ゆるくない…つらい、しんどい。

あっちゃこっちゃ…あっちこっち

扱げる…捨てる。

したけど…そうだけだ。

いたましい…もったいない。惜しい。

ほいど…もの乞い。

みったくない…みっともない、みじめだ。

ごそと…いっぱい。

まるまさって…～さる。可能表現のひとつ。

なして…どうして。

やっこさ…やつのこと。

内地…本州のこと。反対に外地とは言わない。

軍手を履く…手袋に対しても履くと言う。

だら…なら。

無理くり…無理やり。

はんかくさい…いばみかたいな。

見せれ…命令形の「ろ」を「れ」と言う。

かさびた…かさぶた。

サビオ…絆創膏。

ちよして（ちよす）…触る。弄るの意。

かつがず…むしり取る。引っ張って取る。

わや…めちゃくちや。

ないまなんなく…なければならなく。

じゃんご…お金。

しょや（しょ）…でしよう。

めんこい…かわいしい。

だから…文末の「だから」は強い感情を表す。

じよぱりこく…強情を張る。

きかん（きかない）…気が強い。おてんば。

大きゅう…大きく。

なつたれど…なつたけれど。

坊主…子ども。

いっちよまえ…いちにんまえ。

こいで…ふりをした。

おだつて（おだつ）…調子にのる。

なんも…何でもない。

ザンギ…鶏の唐揚げ。

うるかす…水に浸ける。

とうきび…とうもろこし。

～しちやっから…～してあげるから。

汽車…JR。

～するんでない…～するな。

こわい…疲れて、しんどい。

「しっかし、ようこんだけがつばりゴミを集めたもんだ。こつたでつかいの、ゆるくなかつたうに。全部あつちやつちやに投げてあつたもんかい？」

「いや、大丈夫。もうかさびたになってきてるから。」  
「今、サビオ持って来ちやるから。ちよしてるうちにかつぱがして化膿でもしたらわるになる。病院行かないばならなくなつたら、じゃんこもつたないしやあ。」

「いや、時間ないから！」

「したけど、なんぼいたまひからつて、わざわざうちの畑さ持つて来んでも。ほいとじやなしにみつたくない。このごそとあるのなんか、布団綿かい？まるまさって。」

「いや、時間ないから！」  
「い声が粗くなった。もともと気の短い崇史は、制作という根気の要る作業に於いては、常に不機嫌と隣合わせなのだ。ましてや迫る締切。」

「大学の制作課題なんだよ。クリエイティブ・リユースって言って、都市の中で出た廃材を使って新しいものを作る課題。」

「ばあちゃん心配して言つとるのに、めんこくないんだから。あんた昔つからじよぱりこきで、本当にきかんもな。背ばかり大きゅうなつたれど坊主のまんまじや。クリエイティブだのいっちよまえこいておだつたつてなーいもんだ。このきかんの誰に似たんじやか。」

「行つてるよ、T美術大学に。」

「やれやれ、やっこさ大学入つて『ミ集めかい。』

「やれやれ、やっこさ大学入つて『ミ集めかい。』

「やれやれ、やっこさ大学入つて『ミ集めかい。』

ふいに祖母の言葉が七五調で書き出される。するとその句は、現代に至るこの美術史の入り組んだ複雑さに、あつちらんかんとした笑いを挿んでくれるようでもある。

「まあ、内地の学校のことなんか、ばあちゃんには何もわからん。」

「僕だって、よくわからないんだけどね。」

ちくわパンの残りを類張りながら廃材の山へと戻る崇史。明日の夜には中間発表のため、一度東京へ戻らなければならぬ焦りがある。

「だけどあんた、軍手も履かんだら、怪我せんかい。」

「うん、実はさっき、親指の皮切っちゃった。」

「あれれれれれれ。そやって無理くりやるから。はんかくさいことして。どれ見せれ見せれ。」

「カー子も鳴いとるし、もうばあちゃん戻るからよ。晩はザンギするから、米うるかさにならん。明日はよ、おにぎりとうきび持たしちやっから。空港までどやって行くんだ？」

「汽車。」

「遅れるんでないよ。よっこいしょ。あーこわいこわい。」

曲がつた祖母の背中に落ち始めた陽があたる。屈んでいた稲畑が風になびく。かすり傷ひとつでこんなにも真剣になる祖母や、その説教を許す時間の流れ。ひとり畑に残った崇史に、急にそれらが贅沢なものになっていった。あの、玄関にかけてあるミレーの「晩鐘」の複製画さえも。

## 編集後記

SIAFラボ通信第2号が、やっと完成しました！(嬉し泣き)今回は、インタビュー記事がたくさん読みたいパッチリですね。制作にあたりご協力いただいたみなさま、本当にありがとうございました♡

(SIAFラボ通信学生デザイナーてらおか)

## SIAFラボ編集部

SIAFラボ編集部とは、SIAFラボスタッフと、その時々に出会い繋がりを持ったメンバーからなる有機的なチームです。

部員募集中！